

佐藤 郁哉著
フィールドワークの技法
問い合わせを育てる、仮説をきたえる

フィールドで他者とのように出会う。それはドワークといい、関係を作り、またのよいうゲームである。ゲームは別れることになるのか。ソフツがあるとしょう。それはドラクエやファンタジーなどよりはるかに膨大で中身が濃いゲームだ。ゲームに向かう心構えや倫理を説く解説本はあるものの、実際どのようにゲームを進めていいのか、それを丁寧に教えてくれる書物はない。

本書は、本邦初のフィールドワークの「正統派攻略本」であり公式ガイドブックだ。

『暴走族のエスノグラフィー』『現代演劇のフィールドワーク』と優れた作品を世に問ってきた著者。シカゴでアーバンエンスノグラフィーの転換を受け実践してきた著者。本書では、こうした著者自身のこれまでのフィールドワークの体験、悪戦苦闘を反芻し、詳細に解きほぐしてみせる。

暴走族から現代演劇へ。著者のスラングや語り口が微妙に変化していく体験として

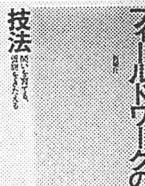
自らの構造化され調査者の関心が強くなる過程。現場メモ、清書版フィールドノート、理論的観察書きなど

までフィールドに出るのである。それはまるで「正統派」のつけた。『問い合わせを育てる、仮説をきたえる』

優れて「正統な」入門語り

体験、苦闘を反芻し、詳細に解きほぐす

好井 裕明



A5判・396頁・2900円

新曜社

4-7885-0788-9

★さとう、いくや氏は一橋大学教授・文化社会学・定性的調査方法論専攻。東北大学院博士課程中退、シカゴ大学院修了。著書に『暴走族のエスノグラフィー』『フィールドワーク』(共著)『現代演劇のフィールドワーク』など。一九五五(昭和30)年生。

著者が大学などでフィールドワークを教え、いろいろと学生から問い合わせを受ける。もちろん簡単に正解など出せない。私であれば、「そんなことわからん、あなたがやってみれば」と突き放しそうな問い合わせ。佐藤氏は丁寧に受けとめ、その答えをなんとかして探し出すと自らの調査体験に踏み込んでいく。このまじめさと「学的營為」としてのフィールドワークの意義を伝えようという著者の熱い意志が、なんともいえない執拗で明快な文体を生んでいく。その場で考えていることをできるだけ精確かつ丁寧に語り尽くし言葉にしていく。同時に本書を読み、その進め方を批判的に検討していく。佐藤氏の語るフィールドワークの技法が、すべてにおいてはましいという志向。まさにそれをものではない。しかし

これがフィールドワークの真髓「正統」である。それはまさに個別具体的な問題関心から、ある人の語りを聞き取るにその端的な例証なのかもしれない。これを読みながら、なるほど佐藤氏の緻密なエスノグラフィーの背景には、こういった丹念かつ詳細な営みの蓄積があったのだな、と改めて私は感嘆した。そして、そのうえでじゃあ私がこれまでやってきたことはなんだったのだろうか、と考え込んでしまう。

たとえば社会問題の社会學をめざす研究者は、問題を生きている人々の現実ににおける問題関心で、自分なりのフィールドワークすることほど必須であろう。その際、本書は必読文献となる。固有の問題が……。(よし、ひろあきらくは本書の場合以上にフィールドワーカー自身の常識や自明性が徹底解説の対象となるだろう。それはわたし自分が……。(よし、ひろあきらかに広島国際学院大学教授・社会学・エスノメソドロジー専攻)